

---

# 始まりは化けダヌキ（仮）

50嵐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

始まりは化けダヌキ（仮）

### 【Nコード】

N8192Z

### 【作者名】

50嵐

### 【あらすじ】

和風ファンタジー

妖魔蔓延る異世界に転生した主人公。生前プレイしていたゲームに良く似たその異世界で、キャラクターを引き継いだ形で転生する。馬鹿な主人公が馬鹿なまま突き進むそんな不思議な物語。

ちよつとネタがお下品だったりもしますので、お気を付け下さい。

一話3000字〜5000字を目安

## 1 - 1 (前書き)

初めての投稿作品になります。  
目標は笑いなのですがすでに上手くないようです。

初めに、この物語はフィクションで異世界でおふざけあり、作中に登場する人物・場所は史実とは関係ありませんのであしからず。

### 歴史日本御伽噺より現代

昔昔、ある所におじいさんとおばあさんが居りました。

おじいさんが山に薪を拾いに、おばあさんは川に洗濯に行きました。

おばあさんが、川で洗濯をしていると、川上から大きな桃がどんぶらこ、どんぶらこと流れてきました。

びっくりしたおばあさんは、頑張つて桃を引き上げると、お家へと持って帰りました。

帰ってきたおじいさんも大喜び。

早速、二人で食べようと桃を割りました。

するとどうでしょう、桃の中に可愛い赤ちゃんがおりました。

子宝に恵まれなかった二人は、きつと神様からの贈り物だとさらに大喜びし、

実の息子のように大事に大事に育てました。

そうです。

彼が後の征夷代將軍にして御伽幕府を開いた「桃太郎」です。

ある日、桃太郎は人間を苦しめる妖魔たちの話を聞き、退治することを決意します。

おじいさんとおばあさんに相談すると、二人は桃太郎のために琥珀色に輝く玉を用意しました。生涯蓄えていた巫女の力を使い、神々の力を玉に宿したのです。

そして、桃太郎は旅の途中で出会った仲間達にその力を分け与えました。

神々の加護を身に付けた、

犬族「後田 利家」が軍政を支え、

猿族「豊富 秀吉」が商業を支え、

鳥族「鳥越 太郎」が民事を支え、

長い月日を掛けて、妖魔から我々人間が住む場所を切り開いたのです。

ですが、平和は長くは続きませんでした。

突如攻勢を強めた妖魔達によって、人間達は次第に追い詰められて行きます。

桃太郎は決断しました。

数いる妖魔たちでも最も戦力がある鬼が島に総力戦を仕掛けると、多大な犠牲が出る覚悟の上です。

鬼が島に上陸及び壊滅作戦は熾烈を極めました。

鬼が島の親玉、悪鬼温羅を討ち果たし、戦には勝利したものの、全兵力の6割が死亡。

留守を守っていたおじいさんやおばあさんに喜びと悲しみが訪れます。

鬼が島で開放された沢山の神々が次々に現れ、人間への協力を約

束してくれました。

ですが、いくら待っても桃太郎は現れませんでした。

人間達は、唯一戻った重鎮猿族「豊富 秀吉」の主導で復興を開始します。

そして2000年後の現在、京都を筆頭として大陸15箇所に神聖域を発見、それぞれ防衛核として街を築くことに成功。

妖魔は変わらず人間の脅威となりつつも、城を中心として、少しずつ城壁を広げ、大都市を築きました。現在から200年ほど前には黒い船が来航し、海の外の人間達と接触到に成功。技術融合により著しい文化革命が起き、黒船に日ノ本の調査団を乗せる事で、多くの世界の国と転移門を繋げる事が出来ました。国間距離が離れすぎているため、大規模術式での小容量運用となる為各国要人しか利用できませんが、それでも各国協力して発展し続けています。

人類が滅亡し掛けた事が嘘の様に、大戦は長らく起きていません。世襲制の支配層の大名や公家達はそれぞれの街で、一国の主のよに認識するようになり、岡山が香海を併合した事件を切欠にして、街間で緊張状態になりました。

山の麓に街『千台』がある。

人口は約3万人程で、子供が多く、老人が少ない。武士階級の間達は瓦屋根の堅牢な城で起居しているが、多くの庶民は炊事・便所・風呂が共同の木製集合住宅で暮らしていた。

街の周りは堀と石垣で大きく囲まれ、人々の暮らしを妖魔から守っている。都市と都市を繋ぐ街道に沿って関所を設け、街との間に農民が生活し畑や田園を広げている。

人間は限られた土地と資源ゆえに、厳しく封建制で統治され、貴族・武士階級が農民や商人を支配している。だが、完全に支配している訳でもなく、神が顕在化するこの世界では、寺院仏閣の場所が第一等神聖域と認識され、半ば独立した組織となっている。その仕事『退魔奉行』として少なからず戦力を持ち、領主との関係は軋轢を生み、歪な支配体系となっていた。

『八百万の神』のそれぞれが特殊な能力を持つが戦闘力に特化する方々は少なく、ある神は防御結界に優れ、ある神は特殊な術を授け、ある神は博打道具に特殊効果を付与したり、神によって効果様々である。そのため、運の悪い神などは妖魔に捕らわれたり『魔落ち』するし、恩恵は神の気まぐれや途轍もない対価を請求されたりもする。

それでも、人々に生まれながら平等に付与された神の恩恵がある。

それが『格（level）』と呼ばれる身体能力を補正する恩恵であった。『格』が上がれば上がる程能力は補填され、基本『十五格』の者は『二十格』の者には勝てない。また『格』が上がれば『特殊技能』を授かり、それは戦闘面生産面遊戯面問わず『格』差を覆したりもする。

ただその対価として人は生まれながら『種族特性』を持つ。純粹

な人間は存在せず、身体に何かしら獣の特徴が現れる。その多くは、その昔神々と共に戦った『干支』 12種の獣の特徴が現れ、『猿族』は俊敏・技術補正が優れ、『虎族』は戦闘系能力補正が優れる。その中でも希少な『辰族』となると全体の能力が優れ、『特殊技能』も強力で、その上長寿だったりするが特に神の影響が強いのか、恐ろしく気まぐれである。

他にも、特定の神に気に入られた場合の『職業特性』『技能継承』『身体変化』、その逆の場合『呪い』『補正剥奪』がある。

『格』は成人（15歳）するまで年齢分自動で上がるが、働いたりすることで若干、妖魔を倒したりすることで大分、差が出来る。『特殊技能』についても人によって違う。

八百万の神から恩恵を授かるようになってから2000年。

それでも、妖魔はいなくならない。

神の力もそれ個では小さな力で、時には妖魔に取り込まれてしま

う。  
強力な上位神たちに気に入られる人間も少数であり、十全に力を発揮出来はしない。

それでも2000年もの間ずっと戦い続け、人間達はいくつかの城砦都市を築く事に成功していた。強力な妖魔の縄張りを避け続け、安息の地を捜し求め彷徨い、漸く見つけ出した神の力が強い土地に根を下ろし、国を興した。人間は都市を防衛の核として妖魔と土地を巡って争い続けている。

今年は何もなく不可もなく、順調に稲穂が実っていた。

もう間もなく刈入れの時期となり農民たちの顔は明るいはずだった。



だが、千台では、夜更け過ぎになると不気味な声が聞こえて来るようになった。

背筋が凍り強烈な嫌悪感を喚起させる喜悦交じりの金切り声、怒声、悲鳴と、生存本能を刺激するような不吉な咆哮が混ざり合い、町人たちに恐怖を強いた。

阿鼻叫喚が上がり、と決まって山の奥が赤々と染まり、動物はおろか妖魔まで逃げているのが目撃されていた。

曰く、鬼か何かが新しく住み着いて暴れまわっている。

そして、その噂を裏付ける事件が起きた。

何百年と街には手を出さなかった妖魔たちが大挙して現れたのだ。第一防衛線の関所が突破されたが、なんとか住民総動員召集令が間に合い、城壁で妖魔を迎え撃った。城壁は高い所で10m低い所で5m、東西南北4つの門がある。反り立ったちよんまげ頭領主の姿はなく、各城壁預かりの役割を持つ武士たちを指揮官として、足軽隊1000名、陰陽師100名と住民兵10000名が東西南の門にそれぞれ分配され、山に接する北門に寺院から派遣された退魔師300名を配置した。

大通りに面した北門がもつとも激戦区で下級妖魔が少なく見積もっても1000匹はいた。だが、人間達も即座に戦力を北門を集中し、弓・銃・陰陽術・特殊技能による遠距離攻撃で対応する。一撃では死なない妖魔も火力を集中することで倒れた。だが何度倒しても妖魔たちは何かに追われるように、城壁を登ろうとする。城壁にへばり付いた妖魔を長槍で突き刺し落とすが、堀が妖魔の死体で埋まって意味を成さなくなっている。気力が尽きて昏倒する兵達が続出しつつも、大きな被害もなく戦闘は六時間で終息した。

幸い防衛線で住民兵に死者は出なかったが、軍兵では訓練を怠っていた武士たちが数十名死んでいた。この事が後に事件を引き起こ

すがそれはまた別の機会に。

これ程の軽微な被害で済んだのは、中級上級の妖魔が殆どいなかったからだ。上級の妖魔がいたらそれこそ街が滅んでいた可能性すらあった。数少ない中級妖魔や、厄介な飛行妖魔は北門に集中したが、問題なく一掃されている。

関所から命からがら逃げ帰った若い番卒が「でつけえ金玉の化けダヌキ」に襲われただ。たぶんあいつが一番強えから親分だべ」と上申する。「始め関所が襲われた時は下級妖怪の『餓鬼』とか『山ねずみ』『山狼』だったんだども、途中からおらたちじゃ手に負えない位強い、そりゃあおっきな金色の『夜叉』が現れて関所の壁をぶつ壊しちまいやがって」そこで番卒は身震いする。「始めはそいつが親玉だと思つとんだがいつの間にか狸の化けもんにキセルでボコボコにされて、そんで化けダヌキがぶつぶつ念仏みてえなの唱えると、黒い煙から現れた他の鬼がババアさ引きずって行つただ。だげんども、あの化けダヌキ、あんま賢くねえだ。自分の味方の妖魔をキセルで叩いてぶつ飛ばすし、服さ着てなかつたし、逃げる時にオラが持つてた酒瓶ぶん投げてやつたら、すごい勢いで飛びついて、泣きながら飲み始めたんだ。いつの間にか中級妖魔たちがそのの周り集まつてたんだもすぐに化けダヌキが仲間割れ始めて、その隙においら食われたくねえから、必死逃げただ。最近もらった嫁っ子一人にする訳にいかねえべな。それにしても本当何さ、しに来たんだあの馬鹿ダヌキ」

妖魔は強ければ強いほど自己を認識する。特に知性が高ければ大抵は人間のように羞恥心が出て、局部を何かしらで隠したくなる。あの鬼ですら、腰布くらいは付けている。つまりフルチン人型妖魔は馬鹿だと推測される。

それ以降その街では、夜騒ぎが起つた時に酒を供えなければ不幸

になるとされた。また逆に、その供えた酒がなくなっていたら幸運が訪れると信じられた。これは化けダヌキに襲われてとつさに酒を投げた番卒が無事生き残ったことや、嫁がすぐに妊娠したこと、街の子供が神隠しに遭わなくなったことに起因する。他にも住民に被害無く、大規模妖魔討伐により周辺が安全になったため農地は拡張されと、結果的に良い事尽くめで、街を救った『でつけえ金玉の化けダヌキ』は庶民に愛されるちよっとお馬鹿な守り神として奉られ始める。

辺りいっばいに、幾重の怒号と悲鳴が鳴り響く。

そんな喧騒の中心から外れた林の隅に、男が倒れている。

真裸で。

鬚に刺さる赤いキセルだけが持ち物か。

やたら毛深く、お尻が赤く、尻尾らしきものが生えている。

面妖な事にその男の体に汚れはなく、何かをされた形跡はない。

ぽつちやりおデブなまん丸お腹が規則正しく、膨れてはしぼむ。

顔は太つておらず、あごがちよつとしゃくれ、下から歯が二本出ているが、結い上げた頭にキセルが刺さっており、どことなく愛嬌がある。ただ、全身に茶色の体毛が生えており猿の様に見えるが、全身を走る黒い刺青と相まって神々しさを醸し出し、男が只者では事を窺わせる。

まあ、道の真ん中に裸で気持ちよさそうに寝ているくらいだから、まともな人間ではない事は確定していた。

近くで絶命する人間の声が響き渡っても、起きる気配すら見えない。

喧騒の中心では、人と人が争っていた。

狼の耳を持つ人間が、猿顔の人間を袈裟切りにして咆哮を上げている。

頭に角が生えた人間が、自分の羽で空に逃げた人間に岩をぶつけて笑っている。

尻尾が生えた狐目の人間が、ぶつぶつ呟くと自分に特徴が似た人間が燃え上がった。

そこにいる人間達に共通するのは自我と二足歩行ぐらいで、目・耳・口など数こそ同じだが、その形や色がバラバラであった。顔がほぼ狼の人間が、人間の顔に角が生えただけの男に、嬉しそうに話しかける。

この世界では純粋な人間は存在しない。

故に、獣人という言葉存在せず、そのまま全てが等しく人間と呼ばれる。

人間の歴史は妖魔との戦いの歴史であり、今も続いている。

妖魔がどう生まれるかは確かには知られていないが、初めは生物に寄生する悪意が凶暴飢餓に狂わせその存在を妖魔と変えると言われ、その子孫はそのまま妖魔となる。

妖魔達を統率するほどの知性を持つ個体は稀少で、その個体の縄張りに手を出さない限り人間と妖魔の力は拮抗しているため、人間達は順調に人口を増やしていった。

安全な城壁の中で戦闘力の低い者も天寿を全う出来、文化が栄えたが、その弊害として人間同士の争いが起こるようになった。

武士階級の横暴、市民階級の我侷、商人階級の暗躍。  
人の心に悪意が棲み始めた。

初めにその事に気づいたのは冥界の番人、死者の生前の罪を審判する神だった。

人が人を襲う事に疑問を抱かず、あまつさえ快樂を得る。

人間の本性としてしまうには、いささか極論過ぎた。

この場の争いも人間のエゴがぶつかった末の単純な解決手段だった。

5人の笑いあう人間と倒れ伏した11人の死者。

あとあつちに、真っ裸の主人公が一人。

「知らない……天井だぁー……」

曇り空に、目覚めた男の第一声が虚しく通る。

どうやら異世界転生主人公お決まりのセリフが言いたかったようだ。

体を起こすと男は満更でもなさそうな表情で、辺りを見回す。

生い茂る草とまだらに生える樹木。

まったく分からなかったらしく、今度は立ち上がる。

「さてと、こういう転生物小説だと、大抵転生直後に、盗賊に襲われている馬車を助けるイベントが　終わっとるっ」

茂みの向こうの広場には馬車があったが、その周りに人間が沢山倒れている。

「俺のヒロインとか、奴隷とか、異世界紹介お助けキャラはっ」

しばらく震えていた男は「ふっわかったぞ」と呟くと、広場に入って行った。

恐る恐る一人一人に近づき確認するが、息のある者はいなかった。殆ど死因が鋭利な刃物による急所攻撃だったが首が飛んでいたり、腰から変な方向へ曲がっていたり、燃え炭になっていたりと悲惨な死に様だった。

男の顔は青白くなり、濃密な血と腐りかけた肉の臭いに何度も吐きそうになったが口から出たのは胃液だけだった。

ふらつきながら馬車に近づいていく。

御者席の方から中を覗くと中で半分に分けられていた。御者半分の側には4人が座れる位のスペースとクッション、木製手枷が1つ、後半分は食料や箱などの荷物が散乱していた。

どうやら近くに生きている人間はいないらしい。馬車にすら馬がない。

「皆、死んどる」

合唱。

男は知らないが、実はこの襲撃の後、1晩経っている。転生した身が回復するまで24時間必要だった。

ここは城塞都市と都市を繋ぐ幾つかある中継駅の一つで、商人が防御結界を作動させていた為、死体に釣られた妖魔の類は近寄ってこなかった。

この広場の中心には御神体の岩が奉られており、祈りを捧げる事で結界が作動する。

下位の妖魔と獣ぐらいにしか効果はないが、それでも行商の危険は格段に減った。

もし魔物に襲われてもここに逃げ込めば、困ったときの神頼みというやつだ。

しかし、ただの中継駅でしかないこの場所に永遠の祈りを捧げるものはない。

男は馬車の中に隠れるように眠っていた。

ほんの数時間。

日は沈み、虫の声だけが辺りに響く。

馬車が揺れている。

馬車の揺れで眠りから覚めた男はこちらに向かってくる蠢く塊を見つけた。

それはゆっくりゆっくり歪な動きをしながら、御者の入り口から



這い寄ってくる。

突然、馬車が横倒しにされ、さらに引っくり返そうとするが屋根部分がつかえて上手くいかない。何が愉快か分からないが外から嗤い声が聞こえる。

馬車の中が真っ暗で状況の分からない男はあまりの事態に茫然自失していた。それでも横に倒された痛みでとつさに、一瞬見えた月の光に向かって飛び出す。着地は無様で顔を庇えずに何度も転がった。

馬車に群がる無数の塊と、その周りにある死体を咀嚼する獣共。その腐り濁った無数の目が男に一齐に向けられる。

生きた獲物の登場に妖魔どもが狂喜し、その内の赤い狼3匹がすぐに襲い掛かる。

「モンスターなら怖くねえ。ゲーマー舐めんな」

一の牙が男の右腕を、二の牙が男の左太ももを、三の牙が男の首筋を捕らえた。

男が三匹の狼を巻き込み自爆する。

〔変わり身の術・改〕

忍術【気力消費 残10% 体力消費 残10% 再詠唱 300秒後】

身代わり人形に1秒間敵の攻撃を受けさせ、自分は1メートル後方に移動する。

人形がない場合は道具袋から相性上位自動選択。胴体武具以外成功率大幅低下。

改：身代わり人形を改造し、ダメージや状態異常を付与出来る。

~~~~~

二匹の狼が粉々に飛び散り、一匹が馬車の方へ吹き飛ばす。

男が転生させられた理由の一つが、この異世界に非常に似たゲーム『妖魔戦国列伝』2030ver』のプレイ経験だった。そして、そのキャラクターのまま転生した。

男は「熱い、熱い」と転げまわっている。

爆煙を掻き分けて残りの妖魔共が男に徐々に近づく。謀らずも半円に囲まれている。

妖魔化した死体が3体。赤い狼が5体。一際大きな灰色狼。

「動く死体なら狩まくって、見慣れてんだよ。雑魚共が」

ちりちりになった体を動かし、素早く印を結び続ける。

「くせえし、グロいし、明日弔ってやろうかと思ってたのに、行き成り祟ってんじゃねー。鬼火 不知火」

「鬼火 不知火」

妖術【気力消費 500 体力消費 500 再詠唱 120秒後】  
中級火属性範囲攻撃。火の玉が敵に自動追尾する。

~~~~~

男の目の前に、幅5mに渡って大小様々な火の玉が現れ、妖魔に吸い込まれるように軌道変えながらぶつかっていく。

「おお、燃える、燃える、良く、燃える」

軽く息切れしているが、成果は上々。大きな狼以外は片付いたよ



地獄から肅々と現る牛頭人身、馬頭人身、醜悪な鬼共。  
岩のような巨体が腕を振るえば肉は弾け飛び、一口で上半身を食らい尽くす。

その存在自体が絶対的な暴力を想起させる。

「あれれ」

男は気力と体力が急速に失われ、気絶した。

残るは阿鼻叫喚。

おまけ

プレイヤー時ステータス

【名前】	ゴえもん		
【レベル】	500	(限界値)	
【種族】	猿族 特殊転生	猿魔族	(鬼を使役できる)
【職業】	忍者 上級職	忍鬼	(一部妖術使用可)
【体力】	8000	(職業/種族補正 + 2000)	
【気力】	7300	(職業/種族補正 + 2000)	
【力量】	1025	(職業補正 + 10%)	
【頑強】	505	(種族補正 + 5%)	
【技量】	2000	(職業補正 + 30%)	
【俊敏】	2000	(職業補正 + 30%)	
【術力】	505	(職業/種族補正 + 40%)	
所持金 /	20,111,225文		

奥義取得可能技能 / 忍術、戦闘術(小太刀・投剣・暗器)、隠密

術、忍術具作成、罨作成

一般取得可能技能 / 呪術、戦闘術（格闘・大太刀・弓・銃）、水練、薬学、遊学

特殊取得可能技能 / 妖術、陰陽妖術

具体的な技能取得にはクエスト達成が必要

備考：身体能力はレベル上がる毎に

体力10・気力10が基本上昇 ボーナス10を振り分け

猿族 力1・頑強1・技2・俊敏2・術1 が基本上昇、ボーナス5を振り分け

#### その他職業

浪人、侍、格闘家（空手・柔術）、忍者、猟師、砲術師、陰陽師、神ナギ（巫女）、傀儡師（からくり技師含）、呪術師（薬師含）、鍛冶師、語り部、博打師

「おい、おっちゃん、おっちゃんてば」

年の頃10歳ぐらいで特徴の無い少年が自分の腰の位置にあるおっさんのまん丸お腹をダルンダルン叩く。その内、肉が揺れるのがちよつと楽しかったのかダルンダルン叩き続ける。後に隠れるようにしていた2、3歳年下の少年も混ざってリズムに乗って叩き続ける。年相応に甲高い声で笑う。年下の少年がある事に気づき、移動する。今度は男の股を指差し、笑い転げまわる。年上の少年は器官に唾液が入ったらしくむせているが、それでも笑いの発作は止まらない。

その明るい声に合わせたかのように朝日が覗く。  
広場の中心にある御神体の岩が朝露を照り返す。

少年の声以外、鳥のさえずり、羽虫や木々の葉の擦れる音さえ一切なかった。

まるで男が目覚めるのを待つかのように。

男の顔に昇った朝日に日の光が当たる。

「うっくん」男は眩しいのか太陽に背向ける。

少年達が盛んに「起きろ起きろ」と騒ぎ始める。

男は起きなかった。

不貞腐れた少年二人も夜通し起きていたせいで眠くなつた。  
男の側の地べたに寝転がりそのまま睡魔に任せて眠りに落ちた。

「知らない……誰だぁー……」

星がいつぱいの空に、目覚めた男の第一声が虚しく通る。  
男の目の前には、警戒を露わに中腰にしてこちらを睨む2対の目。  
少年の風貌をしながらも、その目は老境並に鋭く険しい。

「……俺達二人は気付いたらここにいた。神隠しかなんかだと思  
う。そしたらおっちゃんが寝てた。おっちゃんこそ誰だよ。素っ裸  
だし、なんか体少し火傷してるし、広場はなんかボロボロだし、ち  
っちゃいちんちん丸出しのおっちゃん以外誰もいないし、ずっと起  
きないし、それにここどこだよ」

湯水の如く喋り出した少年を尻目に、男が辺りを見回す。

見晴らしが良い。

そこで漸く、気絶する前の事を思い出した。

男が死んだこと。地獄で閻魔大王と取引したこと。異世界に転生  
したこと。男が使用していたネットゲームのキャラクターで転生し  
たこと。馬車救出イベントが終わっていたこと。妖魔に襲われたの  
で撃退しようとしたこと。

目に入った惨状。御神体周り以外、草木一本残っていない。

辺りは焦土と化していた。

「俺は独りだ」ポツつと呟くと、喚いていた少年が口を閉じる。  
男を見る目がなんとなく和らぐ。

「最初に現れるヒロインはどこにもいない。お助けキャラは死んだ。  
そして　んっ」

男がハツとして少年二人を交互に見る。何度も何度も交互に見る。  
無駄に身体スペックが高いせいで、顔が二つある様に見える程、  
速く首を振る。

少年達が焦った表情で「くそっ妖魔だったのか」と戦闘体制をと  
る。

男は聞いていない。  
だってテンションがマックスだから。  
思わず笑みがこぼれ、少年達には般若の様に感じとられた。

「良かった。天はまだ俺を見捨ててはいなかった。神サンキュウ、  
感謝するぜ」

すると広場の中心の岩が光始める。  
防御結界が作動し、焦土化した台地を優しく包んだ。

少年達が苦しみだし、頭を押さえながら膝を付く。額に薄ら角が  
見える。

男は気付かない。  
だってテンションが上がって「イヤッホウー」とか声まで  
上げているから。



「んっ、何だつて。ワシが誰だつて。おうおう馬鹿言っちゃいけない。ワシは天が赴くままに旅するただの風来坊よ。それでも聞きたいか。そうか聞きたいか。そんなに俺と知り合いになりたいか。親切な坊主達だ。仕方ねえな。ワシの名前は『ゴえもん』だ。古今東西、面白ければなんでもござれな猿人族の忍者よ」

豪快にアメリカンナイズに笑う。

大げさに身振り手振りを交え、ノリに乗って口調がおかしい。鬚から抜いたキセルを鬼火で燻らせ、満悦気に鼻から煙を出す。

少年達は聞いていない。

「ここがどこだつて。そんなのワシヤ知らん。どこだつていいじゃねえか、兄弟。俺達がここで巡り会った縁に神様に感謝しようじゃねーか」

御神体の光がさらに強くなり、少年達が気を失った。

「坊主達だつて何者なんだい。・・・だんまりか。まあ、ワシヤ、気にしねーぜ。実は大名の息子だとか、大商人の息子だとか、桃太郎の子孫だとか言われてもな。第一、その方が盛り上がるってもんよ。大船乗った積もりでつて、寝ちまつたか」

頭に手を当て「これだから子供は」と首を振る。

ゴえもんのテンションがおかしくなってから一週間過ぎた頃、自分ハーレム列伝の夢想がバッドエンドで終わったことでテンションが落ちて冷静になった頭に「あれそろそろ目が覚めないと変じゃね」ってな事で、漸く少年達の異常に気付いた。

だが、ネットゲームのLV500カンストプレイヤーキャラクター「ゴえもん」に不安はない。彼の職業は忍者である。ゲームでのその特徴は高い俊敏性と技術の幅の広さだ。『戦闘術』『隠密術』『忍術具作成』『罫作成』『薬学』『遊学』。その殆どの専門職業義級の技術やレシピを取得出来なため一流とはなれないが、二流にはなれる。戦闘面でも生活面でも応用性が高い忍者は、人気職の一つだった。問題は『忍術』が種も仕掛けもあると言う理念の下、戦闘で使用する忍術を発動させる殆どの忍具が使い捨てのため、結構な金が掛かる。

ゴえもんの薬学は十分二流。不老不死の薬は作れなくても状態異常回復の丸薬ぐらいは余裕で作れるし、だからこそ常備していた。この世界でも薬草など材料の見分けはつくファンタジー仕様。

まん丸お腹に手を突っ込んだかと思うと取り出したるは何種類かの丸薬。

全身に走る刺青の部分がオリジナル忍具『まん丸異次元道具入れ』と肉体を繋ぐ接合部のカモフラージュとなっている。ゴえもんになぜそんなの使っているのか聞けば、ネタ6割と答えドヤ顔、そこで誰も笑わなければそのあと早口で利便性3割、盗難対策1割と答えるだろう。

〈まん丸異次元道具入れ〉

忍具作成オリジナル【作成時 気力消費 全て】

効果：道具圧縮1/10収納 状態保存 忍術補助  
材料：七福神の袋+ガマ蛙の腹+各種呪符・護符

その時は、『高級元気丸薬』『高級解毒丸薬』『高級解麻痺丸薬』  
『高級解呪丸薬』『滋養強壯剤(金)』を試した。少年の頭近くに  
屈み込み両頬を掴む。頬の上から歯の合わさる隙間に指を入れ、口  
を開けさせると、親指の爪ほどの丸薬を5つ入れた。

後は勝手に唾液に解けて飲み込むだろうと男は考える。普通は寝  
ている人間にそんな事をすれば体が拒否反応を起こし勝手に吐き出  
すか、下手をすれば窒息死してしまうだろうが、今回はどうにか上  
手く飲み下したようだ。

～高級元気丸薬～

薬学【作成時 気力消費 2000】

効果：気力体力2000を回復

材料：百年草+中級元気丸薬

～高級解毒丸薬～

薬学【作成時 気力消費 200】

効果：状態異常【毒・猛毒】を完全回復

材料：十年草+初級解毒丸薬

～高級解麻痺丸薬～

薬学【作成時 気力消費 300】

効果：状態異常【麻痺】を完全回復

材料：十年草+初級解麻痺丸薬

〜高級解呪丸薬〜

薬学【作成時 気力消費 1000】

効果：状態異常【呪】を即時回復

材料：聖草 + 初級解呪丸薬

~~~~~

〜滋養強壯剤（金）〜

薬学【気力消費 1000】

効果：一定時間体力を徐々に回復

材料：百年草 + 天狗茸 + すっぱんの血 + ガマ蛙の油

~~~~~

結論から言えば、何の効果もなかった。いや逆に少なからずダメージを与えていただろう。ゴえもんは気付いていないが、少年達の正体は鬼だった。妖魔に連なる者に聖草入りの解呪薬なんて飲ませたら、人にトリカブトを食べさせるようなものだった。幸い鬼の丈夫な体と、元気丸、解毒薬を同時に投与していたため事なきを得た。

そこからが、大変だった。男には状態を回復させるような術を使えないし、いざ治療のために存在するかも分からない巫女や陰陽師、呪術師を探しに行こうにも少年達を置き去りには出来ないし、病人を連れて行くには危険過ぎた。

そもそも「ここどこだ」ってな具合で、男はこの世界を何も知らない。

例えば、この異世界にも『京の都』『富士山』という地名が存在する。だが、男の日本の地理知識は通用しない。異世界は日本の形とは別の姿をしていた。大陸面積の大きさは日本の約5倍。多くの

水と自然に囲まれた温暖気候で生き易くはあるが、多くの魑魅魍魎と土地を分け隔てていたため、争いが絶えず、簡単に街を造ることが出来ない。

元々、この異世界は鎌倉時代に地球から分離した平行世界。かつて日本の東側に存在した土地だった。多くの神が顕在化した事で存在力が空間に過剰な圧力を掛かったため、所謂、御伽噺の世界として人々の意識から独立してしまった。大陸規模の神隠しと考えてくれればそれで良い。異世界が生まれてから千年もの時間が経っており、独自の発展を遂げている。

男がプレイしていたゲームと同じく、文化は明治時代初期のように日本強目の和洋折衷、軍事力は陰陽術が優れているために銃・大砲などの火器を主武器とはしていない。政治体制は一応形ながら帝を頂点としているが、実際は戦国時代の様に大名が各地域を治め、独裁的な力を振るっている。

地球と同じ年月が過ぎているが、熾烈な妖魔との生存競争が続いており、科学技術の発展は緩やかだった。

二日前にこの異世界に現れた男にとってはまず世界の情報を得る事が重要で、ゴエもんという異分子の立ち位置を確認したかった。それだけに、少年達が始めに異世界をガイドしてくれるお助けキャラだと信じて疑っていなかった男にとって、少年達の存在は一旦は失いかけた希望であり救いであった。

どうしても助けたいが、どうにも出来ない。

八方塞がりの状態で出した結論は、ここに住んで少年達の目が覚めるの待つというものだった。ここ一週間、少年達が苦しんでいる様子がなかったものだから、男は思った。きっとこの世界の子

供は沢山寝るんだって。

住むと決めると問題が山積していた。

食料・住居・外敵。

幸い、あの決戦の夜から妖魔に襲われていなかった。

なんとなくあのエリアボスらしき妖魔を倒したからだと思っ  
た。

主人公は知らないが、神による防御結界や、召喚した鬼が周辺の生物を駆逐し、またその強烈な暴力の妖気が辺り一帯の妖魔たちを怯えさせ、遠くに逃げ去った。

そんな事を知らない男は安全面で悩んだ。

ともかく住むところを作り始めた。男は前の世界でマンションに住んでいたが、そんなものは造れない。丸太小屋なら造れるかと、腹から刃渡り2m幅50cm『斬馬刀』を取り出し、近場の木々を伐採する。丸太を両手で抱えて走る。ゲーム内ステータスを誇るゴえもんにとっても結構重たかったが、問題はなかった。

忍具作成のための大工道具があつたが建材加工する程時間に余裕があるわけではないので、いらぬ枝だけ落とし、まさに丸太そのもので積み木のように家の側面となる囲みを作った。長い釘がないので、地面に突き刺しつかえを作り何とか工夫した。材料を丸太のまま使用したおかげで逆に猪が突進してきても大丈夫なくらい頑丈に仕上がった。屋根も丸太で四角い建物になった。所要時間半日。

これで少年達と男の青空ライフは終了した。

布団の代わりに、草や木の葉を大量に集め、道具入れ中に入っていた某アニメコラボイベントアイテムの『狸の着ぐるみ』と『赤い彗星の着ぐるみ』を少年たちに着せ、その上に転がした。顔が丸々

出るタイプだから苦しくはない。体温調整もしてくれる優れもの。  
因みに、トイレには行かない。アイドルだから。

ひと段落した男は、『兵糧丸』を取り出し、飲み込む。味気ない  
食事が終わる。

〜兵糧丸〜

薬学【気力消費 10】

効果：体力100回復

材料：餅米+味噌

~~~~~

キセルを取り出しながら「肉が食いたてえ」と切実に思った。そ  
して、少年達から少し離れて狩りしても大丈夫な環境を早く作ろう  
と硬く決意して、就寝した。

あつと言つ間に2ヶ月、季節は秋が終わろうとしている。

フルチン男がくしゃみをする。

「ごえもんは本気を出し過ぎて、辺り一帯は要塞と化していた。」

まず、丸太小屋と御神体を囲むように幅3m深さ3mの堀を作り、近くの小川を繋げた。掘った土はそのまま小屋側の周囲に盛り、石垣で囲む。さらにその上に罨「鉄条網」を設置した。手持ち材料の有刺鉄線は全部なくなってしまった。

始めは使役する小鬼たちに手伝わそうと呼んでみたがなぜか現れず、気力消費が高いが土系妖術が使える土鬼を呼んだら、黒い闇から現れてそのまま眠ってしまった。叩こうにも起きず、しょうがないから他の小鬼の火鬼、水鬼、木鬼、金鬼、風鬼、陰形鬼を順々に呼んだら全部寝た。「五レンジャー」「チデ鹿」「大仏」の着ぐるみを着せて、少年達と一緒に放り込んだ。

その日は、気力がガリガリに削られたので、男もそこに突っ込んで寝た。

体がチクチクしてうなされた。

次の日、スコップなんてないし作成する材料もないので、普通に罨作成「落とし穴」と併用して「斬馬刀」や素手で一人で頑張った。



〜鉄条網〜 成功率技術値相対準拠

罨【気力消費 500 体力消費 500】

小ダメージ 稀に麻痺効果

有刺鉄線で出来た輪状の網

妖魔の行動範囲を限定できる

材料：有刺鉄線

〜〜〜〜〜

〜落とし穴〜 成功率技術値相対準拠

罨【気力消費 100 体力消費 100 再詠唱 120秒後】

小ダメージ 稀に麻痺効果

穴に嵌まり一定時間移動できなくなる

飛行妖魔には効果なし

〜〜〜〜〜

堀の外側にもどんどん落とし穴を設置する。こちらは落ちたら出てこられないくらい深い大穴だ。丸太小屋作成時に使わなかった枝を使い穴を塞ぐ。

人間が見たら丸分かりだが、妖魔対策だから問題ない。人間が落ちたとしても死ぬ可能性は少ないはずだ。念のため『見習い地蔵』を作成、目印に置く。

〜見習い地蔵〜

遊学【気力消費 10 体力消費 10】

若い彫刻師が彫る像

効果：幸運微々上昇 庶民に人気

材料：石材

〜〜〜〜〜

遮蔽物がないせいで、地蔵の位置は分かり易いが、落とし穴は逆に分かり辛い。男は自分で落ちて気付いた。

分かり易いように、石畳の道にしようかと考えるが材料に不安があるので、砕いた石を巻く。ランダムに穴を掘りまくったので、道は曲がりくねっている。男が通る時は、基本直線的にジャンプしているので道本来の意味はない。

なぜか地獄に返還されない小鬼たちが、いつか手伝ってくれるんじゃないかとずっと期待して態と作業を増やしたりもしたが、完成した。基本、男が帰ってくるまでの時間稼ぎを主目的としてあるため、殺傷力がある罫は少しかない。

これで漸く、男の活動範囲が広がった。

次は食事の問題に取り掛かる。とりあえず、男も少年達も兵糧丸など回復アイテムを与えておけば死なない。事実死んでない。回復させるくらいなのだから、栄養は申し分ない。

「だが」と男は頭を振る。「こんなんでも食った気になかーーー」と叫びながら、森に突入した。

獲物を探す。だがない。獲物探す。だがない。薬草発見。採取。獲物を探す。だがない。夜になる。一旦帰る。帰宅異常の確認。なし。薬草発見。採取。獲物を探す。だがない。ちよつと泣く。獲物を探さず。虫を発見。無理。獲物を探さず。だがない。朝になる。一旦帰る。帰宅異常の確認。なし。少年たちに飯。岩にお祈り。獲物を探さず。だがない。薬草発見。採取。薬草発見。採取。獲物を探さず。だがない。一旦帰る。帰宅異常の確認。なし。獲物を探さず。

だがない。獲物を探す。だがない。妖魔を探す。妖魔を探す。妖魔を探す。発見（幻覚）。『百鬼夜行』発動。気絶。24時間経過。復活。焦土を確認。子供を拾う。一旦帰る。帰宅異常の確認。なし。子供を小屋に放る。

以後似たようなループ。

結果、男の縄張りが広がった。子供が増えたので増築した。山が所々禿げた。

山二つ分南の方の麓に町がある。時折、夜遅く不気味な声が聞こえる。背筋が凍り強烈な嫌悪感を喚起させる喜悦交じりの金切り声、怒声、悲鳴と、生存本能を刺激するような不吉な咆哮が混ざり合い、町人たちに恐怖を強いた。

阿鼻叫喚が上がると決まって山の奥が赤々と染まり、動物はおろか妖魔まで逃げているのが目撃されていた。

その日は、とても風の強い日で、毎年台風でテンションの上がるゴえもんは調子に乗って『ムササビの術』を使い、上昇気流にぐるぐる巻き上げられながら「ウヒヤーサイコー」と絶叫しながら、風は南の山二つ向こうに飛ばされた。

ムササビの術

忍術【気力消費 3 / 毎秒 体力消費 3 / 毎秒】

風呂敷や凧を使って火薬や陰陽術の爆風で舞い上がり、一定時間滞空する

遠距離攻撃可

~~~~~

そして老人4人に捕獲された。

「お主がこの山の主かの」

つるつ禿げに虎耳の老人がゴえもんにそう問うた。肉球はない。ここは山の山頂付近で、植物が少なく石が多い寂れた場所だった。決して老人が無装備でいい場所ではない。良く見ると動物らしき白骨が所々に落ちている。

「ワシらを食べてける」

羊毛でふわふわ頭の老婆が胸元を開帳しながら、迷いなくそう言った。

「はあっ」男は反応が遅れる。心なしか後ずさる。だが、他の老人たちも同じく「食べてける、食べてける」と恐怖心を隠すように一心不乱にゴえもんに近づく。

「これ程虚しいモチ期があつて良いのだろうか」ゴえもんは己の人生を呪った。迷い無く「老人は食わん」、これでもかとはっきりと答えた。

「後生な、一思いに食ってける」

「せめて40年前に来てくれ」

それでも諦めない老人達は肌をさらし、鬼気迫る勢いで懇願する。

「食ってける（食用的な意味で）」

「だから食わん（性的な意味で）」  
「若くないと駄目なんかえ」  
「ああ、ある程度な」  
「別に食ってしまえば一緒じゃろ」  
「いや人生が変わる」  
「ワシらも早う人生を変えたいんじゃ」  
「嫌だ。無理。知らん」

老人達がゴえもんにグイグイ迫る。ゴえもんも異世界に来てから超人的な力を得てしまっているために、乱暴に扱うことも出来ず、されるがままで。

その時、唯一大人しかつた何の特徴も無い老婆が「お主の縄張りはどこか」と質問した。他の老人達が不思議に思っていることに気付かず北の方角を指差しながら「向こうの山に捨てた子供と住んでいる」と正直に答えた。

今度は「すぐにそこに連れてけ」と騒ぎ始めた。「家に帰れよ」と言うと「何じゃ知らんのか。ここは姥捨て山と呼ばれていてな、つまりワシらは自らを捨てたんじゃ」と軽く答えた。不思議と悲壮感は皆無で、飄々としている。

聞けば代々老人達が食料事情のためこの姥捨て山に捨てられてきた。限られた土地の中で、食料生産は限られてしまう。秋の収穫が終わると大体何人が生きられるはつきりと数字で出てしまう。子孫を残すためにまず子供、そして労働力のある中年。貧しい農民にとつて、労力が衰えた老人が犠牲になるのは文化になっていた。基本は誰かが還暦を迎えるとその夫婦兄弟姉妹友達など連れ立って、不作が続くと初老で命を絶つ者もいる。

潔い死に様は、または引き際は、人々に賞賛され、次生の世は幸福になると云われる。

淡々と語るその様にゴえもんは衝撃を受けた。何処かゲーム感覚

が抜け切らないゴえもんにとって、さらに一度死んだ身の上にとつて、死になんとなく冷めていた感情を持っていた。だがどうだろう、この老人達の清しい死の様は。役割を終え死んで逝くのではなく、その死すら残された人々のための役割となっている。

「じゃあ、死ぬって言うなら、俺がその命もらっちゃってもいいんだよな」

ゴえもんはこの老人達を死なせたくなかった。

「ああ子供たちに会わせてくれたら構わん。いつでも食ってくれ」

老人達の目に精気が宿り鋭くなっている。代表して返事を返した爺さんに、思わず惚れてしまいそうになったゴえもんは自分自身に引いた。因みにゴえもんは31歳で童貞の右手の魔術師だったが、格上のクラスチェンジはしたくなかった。

老人達に「どこでもいいから掴まれ」と言うと腹から取り出した『転身の巻物』を口に銜えた。

「転身の術」

忍術【気力消費 100 体力消費 100】  
印を付けた場所へ転移出来る

~~~~~

二人の老婆が胸を当てるくらい両腕をしっかりと組んだことになし、かも右の牛角生えた老婆が巨乳だった事実にも動揺しながら、一向は丸太小屋の庭へ転移した。肩を掴んでいたあの冷静だった老婆が少しふらつく。聞くと「酔った」とだけ答えた。両腕の老婆は離してくれない。

爺さんが御神体の岩に気付くとすぐに祈りを捧げた。  
いつもの様に岩が光る。

すると苦痛が聞こえ、ゴえもんは「またこのパターンか」とげん  
なりした。老人の寝たきりは流石に不安過ぎる。幸いと言っていい  
のか、さっきの冷静な老婆一人のみ二周りくらい巨大化していた。  
ゴえもんは他の3人にその兆候がない事に一安心する。

一息ついて、冷静に老婆が巨大化するのを待った。  
待つべきではなかった。

老婆の額に二本の角が生え、その目は充血し、涎が垂れんばかり  
に大きく開いた口内は肉を容易に引き裂くように鋭利で、舌が割れ  
ている。大きくなった体に耐え切れず着物が肌蹴け、死人様な青白  
い骨ばった胸元が見える。

苦痛とも哄笑とも取れる呻き声を上げながら、唐突に御神体の方  
へ向かい、爺さんを弾き飛ばし、御神体の岩を叩き割った。

「フアアアアツク、まじファツク、お前、まじお前、その岩光る  
んだぞ、超気に入ってんだぞ」

ゴえもんがどうでも良い理由で切れた。

弾き飛ばされた爺さんは、空中で体勢を変え壁を蹴り、空中回転  
しながら戻ってきた。その傍らには老婆が二人油断なく構えを取っ  
て、妖魔に対峙している。

「お主、『夜叉』じゃったのか。まったく糞碌したもんじゃ。ワシ  
んとこの坊主や村子供たちがいなくなっただのはお主の腹ん中と考え  
るべきじゃな。折角の機会じゃ、お主の屍でも孫の冥土の土産に持

って逝くかの」

その言葉と同時に二人の老婆が術を発動させる。巨乳の方が爺さんに回復の術を掛け、そうじゃない方は身体強化の術を掛けている。見る見る爺さんの筋肉がでかくなり、耐え切れなくなった着物が破裂するように散った。

### 鬼ババア vs 肉ジジイ

「jshaaaaaa」  
と同時に叫びながら互いの肉体をぶつける。両者の力は拮抗、鬼ババアは鋭くなつた爪で、肉ジジイは拳で、互いに一步も譲らず命を奪おうと争う。爪が肉を抉り鮮血するが構わず腰の入った拳を顔面に叩き込むのを構わず爪が腹部を切り裂く構わず切り裂かれた方角に逆らわず回転し上段から肩口に蹴りを入れる。思わず踏鞴を踏んだ鬼ババアに『五段蹴り』を発動するも、鬼ババアも『鬼裂き』をカウンターに当てる。

鬼ババアが顎をカチ上げられそのまま後ろに倒れるが、爺さんの右膝下が千切れた。

構わず、左足の力だけで鬼ババアの上に跳躍し『鬼殺し』を発動、巨大な拳に鬼ババアが身を振るが左肩を粉碎、直後爺さんが喀血するも残りの精力を拳に込め殴り続ける。

だが、力なく、鬼ババアの横薙ぎで吹き飛ばされた。

～三段蹴り～

格闘術【体力消費 200 再詠唱 10秒】

中級空手技 空中で五回連続蹴り

他技とのコンビネーション難易度中

~~~~~



〜鬼裂き〜

妖術

鬼特殊技能 己の身体能力を駆使した切り裂き

~~~~~

〜鬼殺し〜

格闘術【体力消費 1000 再詠唱 320秒】

特殊技能 破邪の気を拳に纏わせた一撃必殺

他技とのコンビネーション難易度不可

~~~~~

地面に叩き付けられようとしていた爺さんを二人の老婆がその身で庇う。巨乳老婆が治癒術を開始するのを無視しながらもまだ立ちすぎる。筋肉は萎み、骨が浮きだった裸体の到る所から出血し死に体だが、その口元には笑みが張り付いている。

左肩を押さえ满身創痕の鬼ババアはその笑みに当てられ、果たして自分は勝てるのだろうかと動揺する。明らかに目の前の老人は死に掛けている。止めを刺すのは容易のはずだ。近づいて首を捻ればそれで終わる。だが、このまま放っておいても勝手に死ぬだろう。そんな消極策をとらせる程、老人の気迫が勝る。

夜叉の当初の目論見は、他の人間よりも格が高いこの老人達を食す事で、その為に姥捨て山を縄張りに行っている姉にも協力を頼んだ。この狸の様な妖魔が人間の子供を飼っていると思っただけで付いてきてみれば、他の妖魔たちと鬩り殺しにするはずが夜叉も相当な傷を負ってしまった。

「おい、その化けダヌキ。爺さん達を殺しな。独り占めしようっ

て、馬鹿な考え、起こすんじゃないよ。ぐうつ、あた、しの、姉さんが近くにいるんだ。ほらあたし達が、ぐつ、お前を見つけた、姥捨て山。姉貴は私の、何倍も強くって、あんたもこの辺を縄張りにしてんなら見たことあたりすだろう。『金色の大夜叉』だよ。あんたも事を、構えたくない、だ、ろ」

「お岩さーーん、返事を光らせてくれ、頼む、誰かー、接着剤持ってませんかー、そうだ炊いた米を糊の代わりに」

「化けダヌキ」

「あんつ、ワシ事か。てめえ、よくもワシのお気にを壊しくさってくれたな、おい。お天道様が泣いて懇願しても、てめえだけは許さねえ」

ゴえもんは興奮すると古風になる。

「これ、防御結界石、さ。下級妖魔ぐらい、にしか効果は、ない、それでも居心地悪い、あたしの変化も、解けちまったしさ」

「何、そんな便利岩だったのかい」

「あんた本当に妖魔かい、鈍い愚図だね」

「さつきから何言ってやがる。わしあ、人間でえ。どうかしてるぜ」

「いい加減黙れ。あんたから少し妖力感じるし、人間に化けたいなら服を着なさい。これだから、下級妖魔は馬鹿なんだ、いいからさつきとおしいつ」

夜叉は痛みで己の矛盾に気付かない。ゴえもんがなぜ高度な転移術を使えたのか、なぜ下級妖魔が防衛結界の中で無事なのか、なぜ中級妖魔の自分が焦っているのか、なぜ引きずられているのか。

夜叉が左肩の痛み、絶叫する。気付くと馬面と牛面の鬼が両脇を拘束している。

「なんだいあんた達、お止め。あたしに手を出したらただじゃすまないよ。ほら、お前たちを姉さんに紹介してやるよ。それにほら、最近配下の妖魔が急激に増えたんだ。ここらでいっちょ人間達の街を襲ってみるかかって話でさ、あんたたちも一緒にどうだい。殺し放題食い放題だよ」

牛頭馬頭が答えない代わりにゴえもんが答える。

「オメエは地獄で苦しみ放題だ。ご一緒は遠慮しとく」

黒闇が収束し、濃い暴力の気配がさった。

「悪は滅んだ」

「せえやあ」

掛け声と共に股間に衝撃が迸り、ゴえもんは目を回して倒れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8192z/>

---

始まりは化けダヌキ（仮）

2011年12月26日00時49分発行